

『地域のか』診断ツール ワークブック



一般財団法人 CSOネットワーク
CSO Network Japan



『地域力』診断ツール

～地域資源を活かしたコミュニティの内発的な発展に向けて～

地域の力について

地域に愛着をもった人びとが自らの自然・環境・人的資源を活かして、活気ある地域づくりをしている農山村は、決して少なくない。地理的条件が厳しいほど、知恵と工夫と斬新な取り組みが生まれているように思われる。そうしたところを訪ねると、単に経済成長や貨幣経済という狭い世界にとどまらない、人と自然、人と人の関係性の豊かさが息づいている。利潤の追求のみを目的としない、相互扶助を重視した連帯経済が生まれつつあるとも言えるだろう。

いま、もっとも求められているのは、第一次産業や生業を大切にしながら新たな仕事に結びつけ、いのちと暮らしを守りつつ、柔軟な感覚で魅力を発信している地域に学び、その共通項を見出して普遍化していくことだろう。

共通項の四つのポイント

第一に、地域資源を活かし、それに新たな光をあてて暮らしに根ざした中小規模の仕事(生業)を発展させ、雇用を増やしていることである。

第二に、民間・農協・森林組合・自治体と所属はさまざまだが、地域に根づいた、そして前例にとられない発想とセンスをもち、独走はせず仲間を引っ張っていくリーダーの存在である。

第三に、よそ者(Iターン)と出戻り(Uターン)が多いことである。多くは都会育ちのよそ者は第一次産業の復権や環境保全という価値観のもとに地域の魅力を発見し、全国に伝えている。それがまた新たな人を惹きつける。

第四に、メインとなる仕事で現金収入を得ながら、自らの食べるものをつくり、自給的部門を大切にしている人たちが多くいる。彼らは、安全な食べものをつくる農の担い手でもある。それが過度の商品経済の浸透の防波堤となり、そこそこの現金で暮らせる生活のベースを形づくっている(拙著『地域の力——食・農・まちづくり』はじめに)。

田園回帰と内発的発展

若い世代の価値観が変わってきた。彼らは人間と環境にやさしい社会を志向し、減速して生きようと考え、都市から地方への人口移動が起き始めた(田園回帰・半農半X)。

内閣府の世論調査「あなたは、農山漁村地域に定住してみたいという願望がありますか」という問いに対して、「ある」「どちらかというところ」と答えた人の割合は2005年の20.6%から、2014年の31.6%と、ここ10年で11ポイントも増加している。伸びが大きいのは、20～40歳代男性と30～40歳代女性であり、20歳代男性では2014年に47.4%と半数近くに達している。

田園回帰の最前線は島根県である。「過疎」という言葉は、1960年代に島根県匹見町(現・益田市)で生まれたのが、2012年以降、海士町、邑南町、飯南町、美郷町、知夫村の5町村で人口の社会増がおきている。2009年と2014年の小学校区・公民館区 の人口を比べると、42%(96地区)で30代の女性の数が増加し、30%(69地区)で4歳以下の子どもの数が増加している。特に中心部から離れた田舎の田舎(本庁舎も支所もない地区)での増加が目立つ。たとえば、2005年から2013年の間に、11町村のうち5町村で県外からの転入が増加しており、その最大は吉賀町だ。市で増えているのは出雲市だけである。

また、最新の国民生活選好度調査(2011年度)によれば、「世の中は暮らしよい方向に向かっている」と回答した人はわずか14.3%で、1980年代や90年代より大幅に低い。一人あたり実質GDPは伸びても、多くの人びとは未来に希望をもてないのだ。

だから、私たちはこれまでの社会のあり方と生き方を変えるしかない。都市と第二次・三次産業に偏重した経済成長路線から、農山漁村と第一次産業を重視した内発的発展路線へと。

2016年1月27日

「地域の力」フォーラム委員長
コモンズ代表 ジャーナリスト 大江 正章

目次

1. 「地域の力」診断ツールとは	
1-1 背景	4
1-2 「地域の力」診断ツールの目的と対象	
1-3 診断指標の構成	
1-4 「地域の力」診断ツールの使い方	
2. 診断指標の一覧表	6
3. 各診断指標項目の説明	10
3-1 共生社会(地域の人々による参画と協力)	
3-2 経済・金融・産業(地域内経済循環)	
3-3 自然との共生(地域環境の保持・保全)	
3-4 暮らしと生活(すべての人々の豊かな暮らし)	
3-5 公共施設・施設(持続可能な暮らしの支え)	
3-6 文化・伝統(文化と伝統の保存と継承)	
3-7 主観的幸福度(生活への満足度と将来への希望)	
コラム 「クニ」型NPO	23
4. 「地域の力」診断ツール ワークショップ	27
付録・質問表	37

1. 背景

東日本大震災とそれに伴う原発事故は、日本社会のありかたについて私たちに再考を促しました。一方で、震災以前から、環境や生態系や人々の暮らしを守るための持続可能な地域づくりの取り組みは日本各地で行われています。それらの地域の中には、地域資源の活用や、第一次産業の経済的自立、都市住民との交流等を積極的に図り、外部資源や資金に依存しない「内発的発展」を遂げている地域が数多くあります。

私たち「地域の力フォーラム」は、こうした各地の取り組みを2013年から2年かけて訪ね、その地域づくりのポイントを学んできました。そうした地域には、人と人、人と自然の間に豊かな関係が息づいており、住民主体の取り組みが活発に行われています。それらに共通する要素を「地域の力」と呼び、その「地域の力」こそが、地域に住む人々の幸福度を高め、他の地域の人々を惹きつけ、持続可能性へとつながっていくものと私たちは考えました。

近年、地域の暮らしを評価する試みとして様々な幸福度指標の作成が、東京都荒川区を皮切りに取り組まれています。「地域の力」診断ツールではこの流れも踏まえ、地域住民が主体となる「地域の力」を指標化してわかりやすく提示することを試んでいます。内発的な地域づくりを目指す方々に、この指標を「ものさし」として利用し、新たな気づきや取り組みの検討につなげていただければ幸いです。

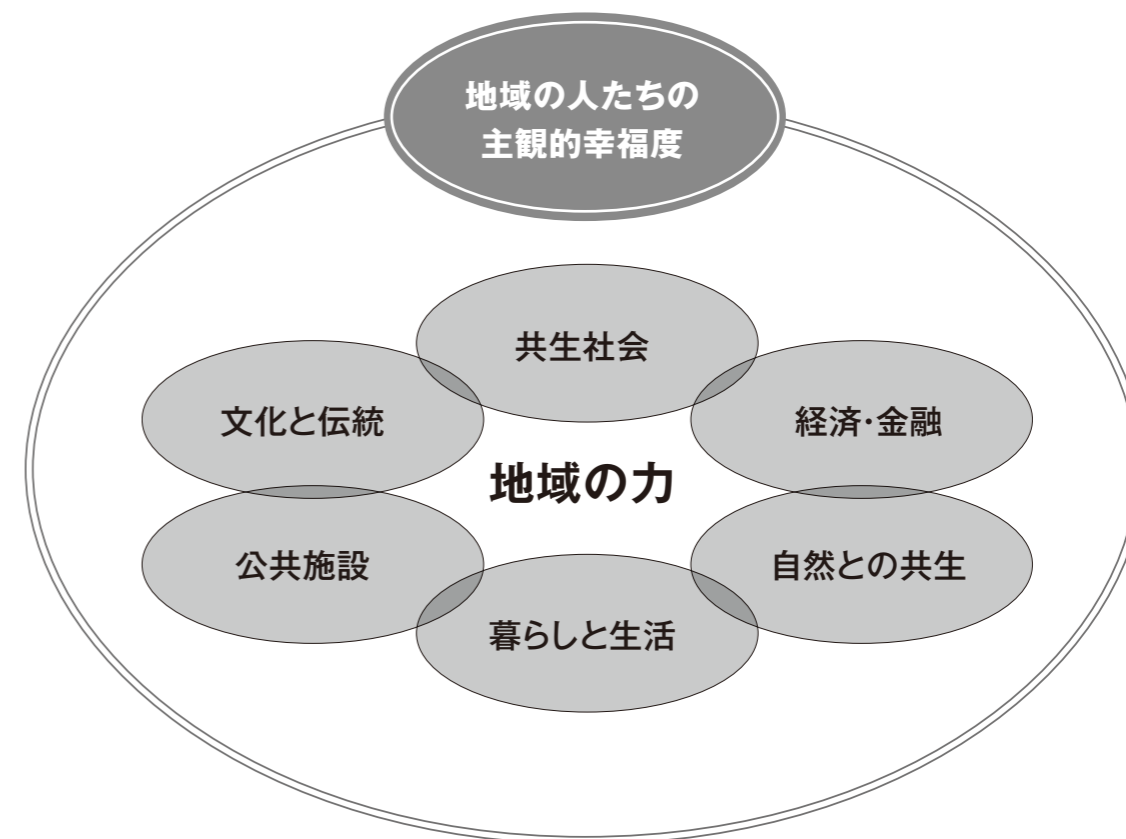
2. 「地域の力」診断ツールの目的と対象

「地域の力」診断ツールは、その地域がどのように持続可能であるかを、その地域に住む人々自らが主体となって診断するための道具です。その診断を通じて、地域の現状を把握し、新たな取り組みへとつなげていただくことを目的としています。

診断ツールの対象は、過疎化、高齢化、持続可能な第一次産業の推進、自然環境の保全、地域の経済循環などの地域の課題に対して、住民主体の取り組みによる地域づくりをおこなっている地域で、地域づくりに汗を流している方々に使っていただきたいと考えています。したがって、「地域」の範囲は様々となり、地域の人々がそれぞれ取り組む単位が「地域」となります。

3. 診断指標の構成

「地域の力」の診断指標は、「共生社会」「経済・金融」「自然との共生」「暮らしと生活」「公共施設」「文化と伝統」の6つの分野から構成されており、それぞれの指標をチェックし、分野ごとに集計し、正六角形のグラフにまとめることで、視覚的にわかりやすく地域の現状を把握できるようにつくられています。この指標に加え、地域に対する個々人の主観的な満足度についてももうかがい、診断結果との関係についても考えていければと思っています。また、各分野の指標については随時見直しを行っていく予定です。



4. 「地域の力」診断ツールの使い方

診断(評価)については、地域の方々と、診断ツールをよく理解している者が本ワークブックを用いながら、ワークショップ形式で進めることを基本とします。

ワークショップ運営者は、「診断指標項目の説明」を参考にしながら各指標項目の概要を参加者に説明し、「付録」の質問表を使って指標項目について回答してもらいます。そして、その結果を集計しチャートにまとめて全体で共有し、それをもとに参加者同士でディスカッションを行っていただければと思います。

本ワークブックでは、ワークショップの運営例や診断結果、私たちが開催した過去のワークショップの様子等も紹介していますので参考にいただければと思います。

2. 診断指標の一覧表

分野	項目	指標	
1. 共生社会 (地域の人々による 参画と協力)	地域運営組織 (自治会・NPOなど)	1	あなたが暮らす地域で積極的に活動している地域運営組織 (自治会・NPOなど)はどれくらいありますか
		2	地域運営組織(自治会・NPOなど)に女性や若者が積極的に 参加していますか
	ボランティア活動、 相互扶助	3	地域内で地域活動(ボランティア活動など)が 盛んに行われていますか
		4	困った時に相談できる人がまわりにいる、 または相談できる場所がありますか
	行政と住民組織の 協働関係	5	あなたが暮らす自治体では地域住民の要望を反映させる 仕組みがあると思いますか
		6	自治体の住民の要望を聞く仕組みでは、住民の多様性 (女性、障害者、外国人等)への配慮がなされていると思いますか。
		7	地域づくりに関して住民が自治体に対して積極的な 働きかけを行っていますか
	地域の安全、治安	8	あなたが暮らす地域は治安の面で安全だと思いますか
		9	消防団の活動は活発だと思いますか
	外部との交流、 受け入れ、発信	10	都市(都市の場合は農山村)に居住する人々との 交流活動は盛んだと思いますか
		11	新たな移住者など地域外の人々を受け入れる仕組みや 人が存在していますか
		12	自治体あるいは地域の団体は外部に地域の取り組みを 積極的に発信していますか
2. 経済・金融・産業 (地域内経済循環)	経済格差	13	あなたが暮らす地域で所得の格差はどのくらいありますか
	金融機関	14	あなたはどんな金融機関を利用していますか。 (地域金融機関の利用度合い) ①大手都市銀行/ゆうちょ銀行/インターネットバンク ②地域金融(地方銀行、農協、地域信用金庫等)
			15
	雇用、持続的な収入	16	地域で起業などの新たなビジネスチャレンジしやすい 環境は整っていますか
		17	商工業・サービス業などの後継者は決まっていることが多いですか
地域の循環経済	18	地域内の商店(全国チェーンではない商店)で 買い物をすることが多いですか	

分野	項目	指標	
2. 経済・金融・産業 (地域内経済循環)	地域の循環経済	19	地域内で農業・商業・製造業の連携が盛んですか (地域の一次産品を地域で加工し販売していますか)
	女性の経済活動	20	女性による経済活動が活発ですか (地域の経済活動に女性が直接的に関わっていますか)
	地域ブランド・特産品	21	住民が主導する地域独自の商品開発が盛んですか
	自然資本を 活かした産業	22	地域営農を守る制度・取り組みがありますか。
		23	農林水産業の後継者はいますか
24		あなたが暮らす自治体には、新たに農林水産業で働こうとする 人々を支援する独自の制度がありますか	
25	地域資源を生かした、外部の人を惹きつける地域独自の取り組みが ありますか(グリーンツーリズム、マラソン大会など)		
3. 自然との共生 (地域環境の 保持・保全)	持続可能な 一次産業	26	有機農業・環境保全農業(生態系に配慮した農業)は盛んですか
		27	家庭菜園・市民農園などに親しみ食べものを作る人々は どれくらいいますか
		28	里山保全の活動が盛んですか
		29	林業では間伐材の利用や広葉樹の植樹など持続性に 配慮していますか
		30	持続可能性に配慮した漁業が行われていますか
		31	地域の自然資源を生かした自然エネルギー開発の取り組みは 盛んですか(風力、太陽光、地熱エネルギーなど)
	自然環境	32	景観を保存する取り組みをしていますか (花の植栽や伝統的な建造物の保全など)
		33	リサイクル・リユース活動は盛んですか
		土地・土壌	34
	35		耕作放棄地を減らす活動が盛んですか
4. 暮らしと生活 (すべての人々の 豊かな暮らし)	健康	36	高齢者が元気に働いたり活動したりする場所や仕組みがありますか
		37	一人暮らしの高齢者を見守る人や仕組みがありますか

2. 診断指標の一覧表

分野	項目	指標	
4. 暮らしと生活 (すべての人々の豊かな暮らし)	健康	38	日常的な病気や怪我に対応できる施設がありますか
		39	①地域内の平均寿命は全国平均と比べて高い方だと思いますか (1が不明な場合は下記2へ) ②地域内で病気やけが等の予防に関する取り組みが盛んですか
	教育	40	生涯学習など自発的に学ぶ機会・施設が十分ありますか
		41	あなたが暮らす市町村では小学校の統廃合が進んでいると思いますか
		42	地域で子どもを育てていく環境が整っていると思いますか
	社会的弱者	43	障害者に暮らしやすい地域づくりが進められていますか
	人の移動	44	あなたのまわりに1ターン者(地元出身ではない方)はいますか
		45	地域づくりに関わる外部人材(地域おこし協力隊、集落支援員など)はいますか
		46	行政の取り組み以外に、新規就農者などに対して農業等の専門的技術や農山村生活のアドバイスを行う仕組みや人が存在していますか
	5. 公共施設・設備 (持続可能な暮らしの支え)	公共交通・移動手段	47
48			日常的な買い物や外出が困難な人をサポートする制度や助け合いはあると思いますか
49			自転車をどのくらい利用しますか(都市向けの質問)
地域の拠点		50	住民が自発的な活動を行う際に利用できる施設が近くにありますか
		51	図書館、公民館、児童館等の公共施設は活発に利用されていますか
		52	地域活動の中心となっている施設等がありますか
エネルギー		53	地域内でエネルギーの自給に関する取り組みが行われていますか、またはそのような取り組みに向けた議論が行われていますか
水路		54	水路やため池など農業用水確保のための維持整備を担う仕組みや組織がありますか
災害対策		55	地域住民による防災への取り組みがありますか

分野	項目	指標	
	その他	56	空き家状況が把握され、利活用を促進する取り組みがありますか
6. 文化・伝統 (文化・伝統の保存と継承)	文化遺産の保存継承	57	有形文化財(建物や施設)の保存活動がありますか
		58	無形文化財(民話の語り部や踊り等)の継承活動がありますか
		59	地域の祭や伝統行事は盛んですか
	スポーツ・芸術	60	住民が参加できるスポーツ・芸術の施設や組織などがありますか
		61	他の地域の人が参加し交流できるようなスポーツ・芸術・食等のイベントや組織がありますか
	食文化	62	伝統的な食材や郷土料理等食文化の保存・継承活動はありますか
	風習・知恵	63	暮らしに根付いた昔からの手仕事や知恵の保存・継承が行われていますか
		64	世代間や異業種が交流しコミュニケーションをとる場はありますか
文化・伝統の教育・情報発信	65	地域の自然や伝統的知識・技術等の地域資源を、地域内で普及・教育・共有するような取り組みがなされていますか	
	66	地域外の人々に、地域の歴史・文化・伝統を伝える取り組みがありますか(情報発信)	
7. 主観的幸福度 (生活への満足度と将来への希望)		67	現在の地域での生活にどのくらい満足していますか
		68	地域に対して愛着を感じていますか
		69	地域に対してどのくらい誇りをもっていますか
		70	現在の地域に住み続けたいですか
		71	子ども達にもこの地域に住み続けてほしいですか
		72	あなたの考える幸せな地域とはどのような地域ですか。具体的にお書きください

1. 共生社会（地域の人々による参画と協力）

■解説

共生社会とは、地域社会の人や組織の間に有機的なつながりが保たれ、互いに支えあう互助的な関係の息づく社会を意味します。地域の中の人間関係や組織間の関係が良好であるということは、その地域の基盤が安定しており、地域内での取り組みなどが進めやすいばかりでなく、困ったことや一人では解決できないような大きな問題が生じた時にも、助け合いや協力の中で対処できる環境が整っていると考えられます。

地域内の様々な人や組織が積極的に活動し、互いに協力し、地域社会に参画している姿を望ましい状態と考え、地域に関わる重要な機会である、地域運営組織（自治会・NPOなど）や地域活動（ボランティア活動など）を、ここでの指標とします。

また、より広く持続的な取り組みにつなげるという観点から、行政の役割を重視し、地域住民と行政との関係についてもここで評価します。地域内の協力関係だけでなく、外部との交流や移住者への支援策等もここで聞きします。

■チェックポイント（指標）

地域運営組織（自治会・NPOなど）

- ・ 地域運営組織（自治会・NPOなど）団体数
- ・ 地域運営組織（自治会・NPOなど）メンバーの多様性

ボランティア活動・相互扶助

- ・ 地域活動（ボランティア活動など）の活発さ
- ・ 困った時に頼れる人や場所の有無

行政と住民

- ・ 住民の要望を反映する行政の仕組み
- ・ 住民の多様性への行政側の配慮
- ・ 住民の行政への働きかけ

地域の安全・治安

- ・ 治安のよさ
- ・ 消防団の活動

外部との交流・受け入れ・発信

- ・ 都市との交流
- ・ 移住者受け入れの仕組み
- ・ 地域の取り組みの発信

■取り組み事例

福島県二本松市東和地区：NPOによる地域づくり

阿武隈山系の中山間地域にある二本松市東和地区のNPO法人「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」は、平成の大合併の際に周辺部として取り残されることに危機感を抱いた地元の農家ら約250世帯が会員となり、2005年に発足した。市から道の駅の運営を受託し、活動の拠点にしている。地元農産物のブランド化や6次産業化、新規就農者の支援、都市との交流やグリーンツーリズム等様々な活動が、地域住民主体で包括的に行われている。



稲刈り体験



農家民宿&農家レストラン

島根県邑南町、吉賀町（旧柿木村）：移住者の受け入れ支援

「日本一の子育て村」を目指す邑南町では、子育て支援策を充実させるとともに、「徹底した移住者ケア」を進めている。役場の定住促進課に所属する「定住支援コーディネーター」が住まいや仕事探しのみならず、生活や近所づき合いなど日常的な悩み相談にも寄り、移住の入り口だけではなく移住後のきめ細かいフォローにも努めている。

吉賀町は、移住者同士のネットワークが強く、その声を広く全国に発信することで新たな移住者を惹きつけている。



邑南町



吉賀町（旧柿木村）

3. 指標項目の説明

2. 経済・金融・産業 (地域内経済循環)

■ 解説

地域内の生産・消費・貯蓄・投資などの経済活動が、可能な限り地域内でなされ循環することにより、地域経済の持続可能性が高まるものと考えます。例えば、持続可能な生産を地域にもたらしものとして、地場産業の雇用の機会や、農林水産業や商工業の後継者の有無に注目します。特産品の開発やグリーンツーリズムなど地域資源を活かした取り組みも地域をアピールし経済的に潤すものとしてここで評価します。地産地消や六次産業化といった地域内での経済的・産業的に連携した取り組みも重要な指標と考えます。

■ チェックポイント (指標)

経済格差

- ・ 地域内の所得格差

金融機関

- ・ 地域金融機関利用度合い

雇用、持続的な収入

- ・ 雇用の機会
- ・ 起業等ビジネスチャレンジの環境
- ・ 商工業の後継者

地域の循環経済

- ・ 地域内商店の利用
- ・ 農業・商業・製造業の連携

女性の経済活動

- ・ 女性の経済活動

地域ブランド・特産品

- ・ 地域独自の商品開発

自然資本を活かした産業

- ・ 地域営農を守る取り組み
- ・ 地域資源を活かした独自の取り組み
- ・ 農林水産業の後継者
- ・ 行政の農林水産業への支援

■ 取り組み事例

宮城県大崎市東鳴子地区: 「連携」を通じた地域づくり

湯治のまちとして栄えた東鳴子地区では、湯治客が減少し地域経済問題が深刻化する中、農業をはじめとする他の産業との連携を図りながら地域再生に向けた取り組みが進められている。農業体験と湯治体験を組み合わせた「田んぼ湯治」のプログラムや、遊休農地を開墾し在来種の大豆を宿泊者とともに栽培し、それを東鳴子地区の旅館で提供する「地大豆湯治@鳴子温泉郷」などが行われている。また、近隣の温泉街との「連携」にも取り組み、各地区の情報を共有しながら共生できる方向を模索している。



雪景色と露天風呂



地大豆湯治



鳴子御殿湯駅

(写真:宮城県観光連盟ホームページより)

徳島県上勝町: つまもの (和食料亭で見られる食事の飾り) による地域おこしビジネス

町内の葉っぱ(もみじ、柿の葉、南天等)を、PCで市況をチェックするシステムをもとに出荷。軽作業のため、地域の植生に詳しい高齢者が活躍。地域資源を活かし経済を活性化させるとともに、生きがいを持ち元気になった高齢者が多くなり、医療費も削減された。

香川県高松市 丸亀町商店街: 地場産食材の適正な流通「丸まるマルシェ」

衰退していた丸亀町商店街は、振興組合の再開発事業で見事に再生。地産地消をコンセプトにした「丸まるマルシェ」は、地元の農家と直接契約し無農薬・低農薬の野菜も販売。地元漁協との協力で資源保護に配慮する漁師の魚を販売したり、地元の隠れた名産品を紹介。中間搾取を排除して、生産農家が作った野菜の値付けをできる市場をめざす。

3.自然との共生（地域環境の保持・保全）

■解説

日本の地域には美しい自然、懐かしい風景が広がっています。これらの自然や景観の中には、その地域に住む人々の日々の営みや努力によって保たれてきたものが数多く存在します。自然との共生では、地域内の自然環境や景観の保全に関わる活動、および自然を生かした一次産業の取り組みを測ります。特に日本の多くの地方の生活の基盤である農業を重視し、環境保全農業の実施状況や耕作放棄地に対する取り組みについてもうかがいます。また、林業や漁業を行っている地域に対しては、それらが持続可能な方法で行われているかをお聞きしたいと思います。自然エネルギーへの取り組みやリサイクル・リユースに関する活動についてもここでチェックしていきます。

■チェックポイント（指標）

持続可能な一次産業

- ・ 有機農業・環境保全農業
- ・ 家庭菜園・市民農園
- ・ 里山保全活動
- ・ 持続可能な林業
- ・ 持続可能な漁業

自然環境

- ・ 自然エネルギーの開発
- ・ 景観保全の取り組み
- ・ リサイクル・リユース活動

土地、土壌

- ・ 土壌を豊かにする取り組み
- ・ 耕作放棄地を減らす活動

■取り組み事例

福島県二本松市東和地区：環境保全農業を軸としたまちづくり

有機農業を中心に地域づくりを行う、NPO法人「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」では有機農業のベースである堆肥づくりのためのセンターを立ち上げ、牛糞や糞殻、おがくず等14種類の地域資源を原料とする堆肥を製造。この堆肥でできた米や野菜、果物を地元の学校給食や都市部の生協などに市場を介さず直接提供し、消費者との交流を進めてきた。さらに、耕作放棄地再生のため、桑の葉やえごま、いちじくなどを加工して特産品開発に取り組み、雇用も拡大。田んぼと桑畑にトンボが舞うふるさとの原風景を子どもたちに伝える、地域資源循環型のふるさとづくりを行っている。



子どもたちに農業を伝える

高知県馬路村：ゆずと木材の商品開発により大きな経済効果

ゆずを食品としてだけでなく化粧品や入浴剤へと商品化することで販路を拡大。通信販売を中心に強い直売力を持つ。森林保護を目的とした間伐材を使った木製ビジネスバッグや木製座布団も人気を誇る。自然体験を求める様々な世代の交流が活発に行われている。

高知県梶原町：環境に配慮した林業をベースにした地域づくり

梶原森林組では国際的な森林認証「FSC」から認証を受けた木材の販売を軸に、農家民宿や伝統的な紙漉き体験を含めたグリーンツーリズムを行政との協働のもと推進。林業就業希望者の受け入れや風力発電等にも積極的に取り組んでいる。

東京都練馬区・神奈川県横浜市：

農の豊かさを提供する都市の体験農園、都市農業援農者の育成

練馬区の体験農園では、園主の指導の下、減農薬の野菜作りを行う。収穫祭、地方の棚田での田植えや稲刈り、ビニルハウスでのコンサート等催しも多彩で農園を通じたコミュニティも生まれている。一方、横浜市では、都市農業を守るために、体験農園の提供、直売所の開設とともに、農業技術指導の講座を開講し、農家の補助労働力の育成を行っている。

4.暮らしと生活(全ての人の豊かな暮らし)

■解説

暮らしと生活では、地域に住む人々の健康や教育がどのくらい保障されているかをお聞きします。具体的には、健康や教育に関する施設や仕組みなどが整っているかをチェックします。そして、一般に社会的弱者とみなされる高齢者や障害者が地域で活発に活動していることを、全ての人が豊かな暮らしを保障されている大切な指標として評価します。

その地域に惹かれ、外部から訪れるIターン者や外部人材は、新たな情報や知恵、労働力をもたらし、地域の暮らしや生活に変革と発展、そして持続性を生み出す可能性を持っています。Iターン者や外部人材の存在とその受け入れに関する取り組みについてもここでチェックします。

■チェックポイント(指標)

健康

- ・ 高齢者の仕事・活動
- ・ 一人暮らし高齢者の見守り
- ・ 病院・診療所等
- ・ 平均寿命 / 病気やけがの予防

教育

- ・ 生涯学習
- ・ 小学校の統廃合
- ・ 地域の子育て環境

社会的弱者

- ・ 障害者の暮らしやすさ

人の移動

- ・ Iターン者(地元出身ではない方)
- ・ 地域づくり外部人材
- ・ 新規就農者へのアドバイス

■取り組み事例

新潟県上越市: 集落再生カレッジ「里創義塾(りそうぎじゅく)」

上越市西部の中山間地、桑取谷を拠点に、民俗行事の復活や棚田の保全、古民家の再生等を手掛けてきたNPO法人「かみえちご山里ファン倶楽部」による、「里」づくりのための総合学習の場。2015年開講。地域づくりの現場に飛び込み活動する若者の多くが悩みを抱えている現状から、地域再生に必要な実務や生存技能、村落集合体に関する思想や理論を、実践に裏打ちされた知恵やノウハウの蓄積から提供している。

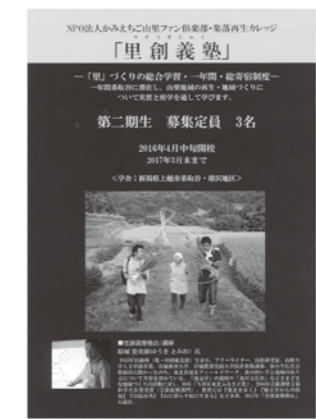


棚田耕作



簡易水道施設

(写真:2016年3月4日「地域の力」フォーラムシンポジウム 関原剛氏講演資料より)



「里創義塾」
パンフレット

福島県二本松市東和地区: 「あぶくま農と暮らし塾」

外部からの新規就農者に有機農業技術などを提供する場として2013年に設立。地域での暮らしや農業を続ける意味を、学びを通して再確認し、未来に向けた取り組みについて考える。農学・地域文化・コミュニケーションの3コースを擁し、一線級の専門家が講師を務める。50名程度の幅広い背景を持つ塾生が学んでいる。



事例発表会



有機農業に関する講義

(写真:あぶくま農と暮らし塾 Facebookより)

徳島県上勝町: U・Iターン者を惹きつけ、高齢者の生きがいでもある葉っぱビジネス

高齢者が、知識を生かしながら無理なく行える仕事があるため、生き生きと健康に暮らしている。U・Iターン者も歓迎し、棚田音楽祭などのイベントを通し地域の人とも積極的に交流をはかっている。

3. 指標項目の説明

5. 公共施設・設備（持続可能な暮らしの支え）

■解説

人々の暮らしや経済を支える公共施設が地域の中でどのように利用されているのかを測ります。これらの施設には、道路・橋梁・鉄道・バス路線等の交通網、電気・ガス等のエネルギー、上下水道やゴミ処理等の衛生設備、電話やインターネット等を含む情報網などが含まれます。また、学校や病院、図書館や老人ホーム、緊急時の避難場所や役所の出張所など、暮らしを支え豊かにする施設も含まれます。

一方、地域の暮らしや経済を支えるものとして、灌漑設備の維持整備や防災への取り組み等もこの項目で測ることとします。

これらの施設の充実度や持続可能性、利用のしやすさや地域住民による参画度合いが、地域に住む人々の満足度を高める「地域の力」につながるものと考えられます。

■チェックポイント（指標）

公共交通・移動手段

- 公共交通機関の充実度
- 自転車や公共交通機関の利用率の高さ（CO₂排出抑制の取り組み）

地域の拠点

- 住民の自発的活動拠点の有無
- 図書館、公民館・児童館等の公共施設の利用率

エネルギー

- エネルギー自給率

水路

- 灌漑設備の維持管理

災害対策

- 地域住民の防災への取り組み

その他

- 空き家利活用の取り組み

■取り組み事例

岩手県葛巻町：自然エネルギーを活かしたまちづくり

「北緯40度、ミルクとワインとクリーンエネルギーのまち」というキャッチフレーズを掲げる葛巻町。岩手県の山奥にある人口7,000人余りの小さな町ながら、全国各地から年間多数の視察者が訪れます。葛巻町では早くから高原の地形を活かした風力発電に取組むとともに、町の基幹産業である牧畜から発生する糞尿を使ったバイオマス発電や間伐材を使ったバイオマスチップ、ペレット等の熱利用などを行い、町の電力自給率160%を達成しています。また食料の自給率も200%を確保しています。



山岳高地に建設された風車



家畜排せつ物を活用するバイオガスプラント

福島県喜多方市山都地区：山腹水路「本木上堰」の整備

山都地区に広がる美しい棚田の景観は「本木上堰」と呼ばれる山腹水路によってもたらされる豊かな水によって支えられています。江戸時代から260年もの間脈々と受け継がれてきたこの素掘りの山腹水路の維持管理の困難さを理由に稲作をやめる人が多かったため、最も人手の必要な春の堰浚い作業にボランティアを募り、都市住民と農業者との提携関係の中で、稲作に必要な水路の維持を果たしています。ボランティアは水路由来のお米や日本酒を直接購入するという経済的な結びつきにも発展しています。



江戸時代から受け継がれた山腹水路本木上堰



地元小学校や住民と協力し生きもの調査なども実施

(写真：本木・早稲谷 堰と里山を守る会 Facebookより)

6. 文化・伝統（文化と伝統の保存と継承）

■概説

その土地に伝わる文化や伝統は、地域に対する誇りや愛着をもたらす重要なものと考えられます。ここでは、地域の中の伝統文化の保存・継承に関する取り組みや、新たに創造された文化・芸術・スポーツ等の活動を、地域の人々の満足度を高めるものとして評価します。伝統文化には、寺社・仏閣・史跡・祭・伝統行事等の有形・無形の文化財はもとより、代々その地域の家庭の中で受け継がれてきた食文化や風習・知恵なども含まれます。文化・芸術・スポーツ活動に接したり楽しんだりできる環境にあるかもお聞きします。

■チェックポイント（指標）

文化遺産の保存継承

- ・ 有形文化財の保存活動
- ・ 無形文化財の保存活動
- ・ 地域の祭や伝統行事

スポーツ・芸術

- ・ スポーツ・芸術の施設や組織
- ・ 地域外の人が参加し交流のできるスポーツ・芸術のイベントや組織

食文化

- ・ 食文化の保存・継承

風習・知恵

- ・ 手仕事や知恵の保存・継承
- ・ 世代間のコミュニケーション

文化・伝統の教育・情報発信

- ・ 地域資源の普及・教育・共有の取り組み
- ・ 地域外に地域の歴史・文化・伝統を伝える取り組み

■取り組み事例

山形県白鷹町： 伝統保存食の加工販売

置賜盆地のすそ野に位置する白鷹町の農産加工グループ「しらたかノラの会企業組合」では、無農薬、省農薬の農産物を原料に、添加物や化学調味料を使わず、地域で昔から作られてきた漬物や餅、オリジナルの惣菜や菓子など様々な加工品を生産・販売している。効率を求めることなく、機械化を避け、昔ながらの保存食等を多品目手作りすることにこだわり、地域の食文化の継承に貢献している。当初32品目から始まった加工品は現在では60品目を超え、注文販売の会員数も約300人に増加した。



しらたかノラの会の加工品



しらたかノラの会の皆さん

新潟県上越市： 地域伝統文化の保存継承

上越市西部の「桑取谷」を活動拠点とするNPO法人「かみえちご山里ファン倶楽部」では、地域内の手業による生存技能の残存状況を網羅的に調査・分析し「あと何年でどの技術が消滅するのか」という危機状態をあぶり出した。およそ10年後には、ほとんどの技能が失われるという結果を受け、地域の人々とともにNPOを設立。地域住民が中心となって行う民俗行事の保存継承や、地域の伝統文化・生活技術等の保存やその活性化事業を行っている。



盆踊りの復元 実施 夢に出てくる盆踊り



月満夜の神楽 創設

(写真:2016年3月4日「地域の力」フォーラムシンポジウム 関原剛氏講演資料より)

7 主観的幸福度(生活への満足度と将来への希望)

■概説

最後に、その地域の暮らし全般に対する感想をお聞きできればと思います。「主観的幸福度」という項目ですが、「幸福」のとらえ方は総体的なものであり、感じ方も人により様々であると考えられるため、幸福度に含まれる、あるいは影響を与えらると思われる、現在の生活への満足度や、この地域に住み続けたいかなどの将来への希望についてお聞きする中で、地域の豊かさや魅力、あるいは課題等について、そこに住む方々の思いをくみ取りたいと思います。

この項目は、チャートに表示することは馴染まないと考え、自由記述部分のあるアンケートによりお答えいただき、前述の6項目との関係を分析する形をとります。

■チェックポイント(指標)

- ・ 現在の地域での生活への満足度
- ・ 現在の地域に住み続けたいか
- ・ 地域に対する愛着
- ・ 子ども達に現在の地域に住み続けてほしいか
- ・ 地域への誇り
- ・ あなたの考える幸せな地域とは

■取り組み事例

東京都荒川区：荒川区民総幸福度(GAH)の作成

「区政は区民を幸せにするシステムである」という区長の考え方の下、荒川区自治総合研究所により荒川区民総幸福度(GAH)指標が作成された。指標をもとに区民にアンケートをおこない、課題を抽出し、政策へと生かすことを目的としている。荒川区長が発起人となり、住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合、通称「幸せリーグ」を平成25年に設立。



荒川区民総幸福度(GAH)パンフレット

「クニ」型NPO

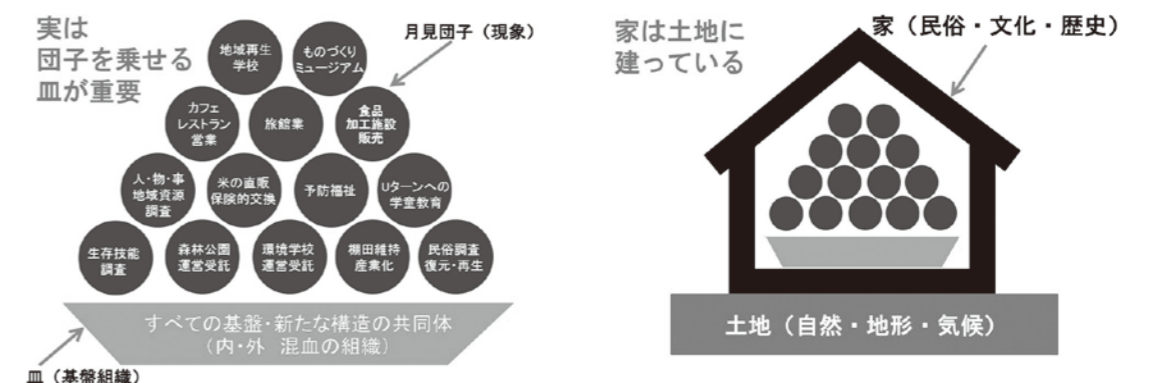
その機能と近未来の効果、そのための人材育成拠点の重要性について

(特活)かみえちご山里ファン倶楽部 専務理事
関原 剛

■「クニ」とは我々が定義した言葉であり「任意で設定された集落集合体であり、自給的な生存様式を残存させ、自主的な組織と運営能力を持つ自立的コミュニティ」である。この3つの要素が揃ったとき、そこは「クニ」と呼ぶようになる。このような意味を込めてカタカナの「クニ」という言葉を使っている。

■かみえちご山里ファン倶楽部は2002年に設立され、現在会員数約300名、常勤スタッフ8名である。さらに昨年地域再生のための塾を開校し、現在塾生が1名在籍している。地方の小さなNPOではあるが、年間予算4,000万円という規模は大きい。活動地域の集落数は25、人口は2,000人弱である。この組織は設立以来様々なことをやってきた。行政との連携による森林公園の運営受託、子供向けの環境教育の学校、棚田維持・再生、民俗調査と復元再生、地域資源調査、米の直販(保険的交換、市場に出すものではない)、予防福祉、学童へのUターン教育、加工品販売、旅館業(廃校の活用、古民家保全)、ものづくりミュージアム、地域再生の学校など多岐にわたる。

■多様な活動が、いわば月見団子のように並んでいるが、ある意味これは現象でしかない。大事なことは、こうした月見団子を生み出す「皿」(基盤組織)にある。現象そのものを生み出す「皿」(基盤)とは「新たな構造の共同体」に他ならない。これこそが、いま地方再生において考えねばならないことだ。現象という団子に目を奪われるのではなく、それらを作り出す「皿」をこそ注視しなければならない。しかし「皿」と言ってもそれは野ざらしに在るものではない。団子と皿は「家」(民俗・文化・歴史)に守られている。したがって「家」(民俗・文化・歴史)と乖離した組織を作っても、それは短命に終わる。また「家」は、「その場所」という「土地」(自然、地形、気候)に建っているということ知らねばならない。たとえば都市からやってきた人が「環境」という抽象論で組織をつくろうとしても、「土地」(自然、地形、気候)や「家」(民俗・文化・歴史)という「通時性の塊」を理解せずにいれば、その活動は扁平なものになり、単発イベントの繰り返しに陥ってしまうだろう。このような「そもそも」の基盤を見据えて、地域再生活動がなされなくてはならない。



■さて当地において山里NPOが作られたきっかけのひとつは、行政が地域の中に水源森林公園を作ろうとしたことであつた。市から地域に責任ある組織を作るなら最初からその組織に運営委託しても良いという提案があつた。これは地域組織に対して行政がアドバンテージを規定したことになり、この判断は先駆的であつたと思う。それがNPO設立を後押ししたのは重要な事実である。そこには「運営基礎経費の確保」という課題があつた。

もうひとつの設立動機は、地域内で「生存技能調査」を実施したことにある。全戸配布のアンケート調査を行い、手業による生存技能の残存状況を網羅的に調査した。それはどのような技能を何人が保持しているかという調査である。この結果を分析し「あと何年でどの技術が消滅するのか」という危機状態をあぶり出した。言い換えれば、それは技術伝承のための猶予時間の明示であつた。結果はおおよそ10年後には、ほとんどの技能が失われるというものであつた。この結果をもとに地域説明会を行い「このまま消えるか」「座して死を待つよりジタバタするか」という議論が交わされ「ジタバタしよう」という結論がNPO設立のきっかけとなつた。これは主体的な判断のため「危機調査」の重要性を現している。

■NPO活動が始まった頃は、往時に比べて集落の活動性は縮小していた。また集落間の行き来も減少していた。このような状況下でNPOが駆動し、若いスタッフが人々をつなぐ「ひも」として機能し始めると、かつて連動していた集落集合体の「かたち」が、ぼんやりと浮かびあがってきた。若者が「ひも」として機能したのは単に有能だったからではない。他所から来た若者は、集落に対して何のいいこともしていないが何の悪いこともしていない。すなわち村に対して何の前科もなかった。これが「ひも」として機能した要因であつた。誰に対しても公平に接することができるということは、しがらみや因習を克服する上で不可欠な要素である。このようにして若者たちは「ひも」として駆動し始める。その「ひも」は、個と個、個と集落、集落と集落、都市と村、行政と村落集合体、大学等と村落集合体をつないでいった。

■若者たちは様々な「つなぎ」を行うが、その若者たち同士を「つなぐ」のは人ではない。それは「行動哲学」である。我々は地域再生を目指す若者に「4つの問い」を投げかける。それは「何のためにそれを成すのか(行動哲学)」・「どのようにそれを成すのか(具体方法)」・「誰がそれを成すのか(組織)」・「どのようにそれを維持するのか(経済)」という「そもそも」の問いである。この問いに簡単に答えられないにしても、答えのために悩み続けることそのものが行動哲学を育ててゆく。このような問いが不在のままでは、本質的な活動はおぼつかない。



水車復元(横畑)



茅葺技能

■高度成長期以降、農山村の深層心理はマスメディアによって傷つけられていた。いわく「汚い・遅れている・訛っている」。このような「外傷」を放置したままの村落再生はあり得ない。まずその「外傷」を治癒しなくてはならない。それを経て始めて「誇りの再生」が始まる。このような「治癒」と「誇りの再生」には他所者も重要である。他所者の目と土地の人の目が出会い、いわば音叉のように共鳴したとき、集落に隠されていた価値という「単音」が生まれる。このような「単音」の見つけ出しがまずもって重要である。このような「そもそも」の起点が不在では何も始まらない。しかし同時に、このような活動だけでも物事は進まない。集落の素晴らしさを発見し「単音」を響かせたら、次には恒常的な活動へとシフトしなければ「単音」の価値は失われる。そして「次の活動」こそが山里NPOのような総合的な活動である。「村のお宝マップ」を作っただけでは、その「マップ」はやがて公民館の引き出しにしまわれたまま二度と陽の目を見ないということになってしまう。

■「クニ」的なNPOとは、それ自体の組織構造も重要だが、まずもってそれらが「地域社会」という基盤の上に成り立っていることを自覚せねばならない。言い換えれば「クニ」的なNPO活動を目指すなら、まずは地域社会からの「許容」が必須であるということだ。これがすべての基盤となる。その上でNPO自体の組織構造が形づくられる。このようなNPO活動では、しばしば「若者」がクローズアップされるが、実は地域の人々による「理事会」の質が重要である。それは実質として機能するものでなくてはならない。「理事会」とは活動する若者を「保護し・指導し・導く」ものである。同時に外部からの荒波から守る「防波堤」でなくてはならない。義理での参加や総花的な参加の理事は役に立たないのだ。それゆえ本当の意味での人格者、実行力のある人を時間をかけても探し出す必要がある。また、すべての理事を内部者で構成するのではなく、少数でも外部(都市部)の理事を加えた方がよい。それはすなわち「井の中の蛙」にならないためだ。

■我々の組織では「～体験」から「～学校」へというというシフトを行って来た。「～体験」とは、しばしば「田舎のディズニーランド化」をもたらした。それは村人が「グリーンツーリズム産業」のために「エキストラ」と化してしまったということだ。しかも収益性は低下してゆく(同じような特徴の産業はやがて競争しダンピングが始まる)。これでは意味が無いと思い「学ぶ」ということにシフトした。現在「棚田学校」を運営しているが、これは遊びではないので頻りに棚田に通い本当に「学ぶ」場となっている。このような「真剣に学ぶ」事業を通じて、都市から通う人々が増えている。このような人々たちを、我々は「往還者」と定義している。このような「往還者」は旅行者でもなく移住者でもない。頻りに通い、関係性をつくり、帰属感を抱き、経済性を伴って「往還」する人々である。これら「往還者」は「クニ」の近未来における重要な構成者となるだろう。必ずしも定住者だけが価値なのではない。「通う人々」も等しく重要なのだ。



棚田学校

■「クニ」が自立してゆく「基礎経済」を考える時に「優等生の村が勝ち残る仕組み」から「平凡な村が存続する仕組み」へと考えを変える必要がある。これは「往還者」とも関係することだが「クニ」が自給した上での「余剰(米など)」を、組織維持経費を加算することを承知の上で「往還者」に買ってもらい、その売り上げを組織維持費に当てるといふ考えだ。代わりに「往還者」は食の安全性や「内」の人間としての処遇、共同体への所属、あるいは都市災害の場合の疎開保証などを得る。これは「市場出荷物」ではなく、いわば「保険的産業」として、「物」と「都市で生きる上での安全保証」との交換構造と言える。日本各地の農山村は、たとえそこが兼業農家ばかりの地域であっても、実に大きな「余剰」を作り出している。それら「平凡な村の平凡な産物」を都市と農山村の「つなぎ」として使えば良い。そしてそれら小さく守備的な経済が機能し共同体維持が担保された上で「特産品開発」を試みればよい。

■地域再生を目指す若者には、総合的スキルが必須である。ただ若者が集落へ行けばよいというものではない。そこには実に多様な総合的能力が求められる。それがなければ若者に対する地域の失望は時間の問題となる。事前の学びの重要性はさらに認識されるべき課題だ。同時に、受け入れる地域にも課題は多い。前述したように「防波堤としての理事会」が機能しなければ、孤独な若者たちはすぐに周囲からの圧力に立ちすくむことになる。たとえばそれはローカルの権力者によるパワハラ、セクハラであり、行政からの隷属強要であり、あるいは無責任な理事による「若者の人生の消費」が横行するということだ。くりかえしになるが、若者はまずしっかりとした学びを行うべきであり、地域はしっかりした受け皿の構造を創るべきだ。それら両者が揃って、始めて機能する「地域再生」が始まる。

(2016年3月4日「地域の力」フォーラムによるシンポジウム 関原剛氏 講演の記録より)

ワークショップ編



火打山



牛と田かき

(図と写真は、シンポジウムの際の関原氏の投影資料より使わせていただきました。)

1. ワークショップの運営

■ワークショップの意義

ワークショップは、新たな気づきや学び、問題解決のためのアイデアなどを生み出すための手法です。一方的な講義形式ではなく、場に集まった参加者同士が、対等な関係性のもとで対話を行うという参加型の形式で行います。多様な考えが交わることで新たな考えが創出され、共有されることを意図しています。

「地域の力」診断ツールはこのようなワークショップ形式で用いることを基本としています。ワークショップを通して診断を行うことで以下のような効果を期待しています。

- ・ 地域づくりに関心のある地域の方々が集うきっかけになる
- ・ 診断だけでなく、結果について議論することで内容を掘り下げることができる
- ・ 地域課題について語り合うだけでなく、その解決に向けた実践へとつなげてもらう

「地域の力」診断ツールは自分たちが暮らす地域の現状を見つめ直し、地域を自分たちがより生き生きと暮らせる場所へと変えていくためのヒントを掴むためのものです。それには地域の人たちの主体的な参加と取り組みが求められます。

■ワークショップの大事な要素

・ ファシリテーター

ワークショップの設計と場づくりを中心的に担う存在です。参加者が意見やアイデアを活発に出せるかどうかはファシリテーターの腕にかかっています。

・ 目的と目標(何のために行うのか?)

目的と目標を明確にすることで、ワークショップは意義のあるものとなります。何のために、その時間内で何についてどこまでの合意を得るかを事前に共有します。

・ 参加者(誰を呼ぶのか?)

基本的にはワークショップのテーマに深い関係がある当事者を集めることで、机上の空論ではなく実際のアクションに結びつく議論を目指します。

■ワークショップの運営例

趣旨説明と目指すゴールの共有	ワークショップ開催の趣旨を説明し、本日の話し合いのゴールを伝えます。
グループ分けと自己紹介	グループ分けを行い、自己紹介や簡単なゲームなどで緊張をほぐします。
診断ツールの解説	ワークブックを参照し、診断ツールの概要と各項目の説明をします。
診断・集計・結果発表	参加者に回答してもらい、その結果を集計、結果の発表を行います。
グループディスカッション	自分たちの地域の現状、そして今後の取り組みについてグループごとに議論します。
発表と感想のシェア	グループでの話し合いの内容を全体共有し、最後に感想を述べ合います。

■ワークショップのポイント

・ 診断プロセスを踏まえた多面的な話し合い

地域の関心ごとや問題意識は人それぞれ異なります。診断を通して地域の多様な側面について考えることで、包括的な視点を養います。その上で自分が知らない分野の知識を持つ他の参加者と話し合いを行うことで、有意義な体験が生まれます。

・ 地域の「強み」「弱み」の議論と「内の目」「外の目」を持つ参加者

地域の「強み」は別の視点・人にとっては「弱み」になり、また逆も言えます。「内の目」「外の目」を持つ参加者が入り混じることでその議論は顕著となります。

2.ワークショップ実施報告

2015年度は、持続可能な地域づくりに取り組む福島県二本松市東和地区と福島県喜多方市山都地区の皆さんに、試験的に診断ツールを使ったワークショップを実施していただきました。東和地区、山都地区ともに、豊かな自然に囲まれた農業を基盤とする中山間地域で、人口の減少や農業の担い手の高齢化が進む中、地域資源を活かし都市住民を巻き込んだ住民主体の地域づくりに取り組んでいます。

■福島県二本松市東和地区ワークショップ

(2015年10月19日15:00～18:00、道の駅ふくしま東和 あぶくま館にて)

新規就農者の積極的な受け入れや、農産加工品の開発、グリーンツーリズムの推進等、地域全体で進める様々な取り組みの母体である「特定非営利活動法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」の協力のもと、地域の方14名(NPO関係者、社協、農協、集落支援員等)にご参加いただき、ワークショップ形式で「地域の力」診断ツールを活用しました。診断ツールの質問表に記入回答していただいた後、グループごとに診断ツールの各分野についての議論を行い、その後、議論の内容を全体で共有し、今後の取り組みについて考えました。

「共生社会」の分野では、全体的に高い評価となりましたが、その一方で、地域活動の中核は団塊の世代であり、次世代への継承が課題との指摘もありました。「経済・金融」分野では、所得格差は比較的大きいものの、小規模な自給経済の取り組みが活発であるところに持続可能性が感じられるとの指摘がありました。また、地域内循環経済を進めるには、商業と農業の更なる連携が必要との意見もありました。

「自然との共生」分野については、有機農業への積極的な取り組みや、美しい景観の保全活動、リサイクル・リユースの取り組み等、東和地区の強みの部分との認識が共有されました。中山間地域なので、ある程度の不便は当然であり、そのような暮らしの中でどの程度の利便性が必要かということが、個人の幸福度と関わってくるのではないかの意見がありました。



東和地区ワークショップの様子



菅野正寿氏
(2014年IFOAM有機世界会議にてブータン農林大臣と)

福島県二本松市東和地区
菅野 正寿 あぶくま高原 遊雲の里ファーム主宰

震災から5年が経ち、あらためて地域の力、農業の役割を考えてみたい。地域の力診断ツールは、自分たちの地域の実態調査をするという意味で大事であると感じた。東和では都市との交流を進める中で、NPOが立ち上がった経緯がある。新規就農者受け入れや道の駅での農産物の直販など色々やってきたが、課題としては市の行政に反映されていないということである。定住支援部署の設置など、持続的なものにしていくことが必要ではないだろうか。

この5年間で、福島県の農業人口は30%減少した。未だに稲作を再開できない地域もある。行政だけではなく、集落や地域の力が試されている。米作りをやめた集落が続出し、里山の風景がなくなっていく。たった2～3年の間の大きな様変わりを実感している。販売農家も5万戸減っているが、一方で生産農家は減っていない。自給している高齢者の力を評価したいと思う。新たな共同の力をどう作っていくのかが、これからの大きな課題だと思う。

地域にNPOがあったことで、震災後も様々な取り組みが可能になった。いわゆる「往還者」の存在も大事だが、都市の人々とともに取り組む組織づくりも大事ではないか。地元の人々だけでは限界があり、地元の利害関係もある。福島農業は、企業や都市市民との協力によって再生していくしかないのではないか。福祉、防災、食料協定を都市と結んでいくことができないかと考えているところである。(2016年3月4日「地域の力」フォーラムシンポジウム報告より)



東和地区 棚田風景



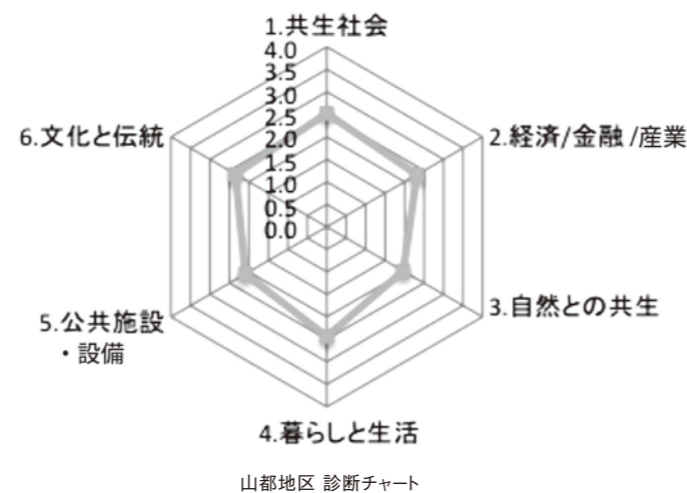
語り部 東和の昔話の伝承

■喜多方市山都地区ワークショップ

(2016年1月28日14:00~17:00、いいで荘会議室)

山都地区の豊かな地域資源を活用し、地域の活性化を図ることを目的に結成された「e-Deあいこさえ隊」の皆さま14名(商工会、山都そば協会、山都地区グリーン・ツーリズム推進協議会、山都町郷土史研究会、山都若衆会の方等)にお集まりいただき、ワークショップを行いました。各自の質問票の回答を集計後、参加者全体によるチャートを作成し、山都地区の「地域の力」を視覚的に捉えることを試みました。その後グループ内で、各自のチャートも共有しながら、地域の強み・弱み、それらへの取り組みについて議論し、その結果を、最後にグループ毎に発表しました。

全体のチャートは、「共生社会」と「暮らしと生活」分野の評価がやや高く、「自然との共生」「公共施設・設備」がやや低い、縦長で下方幅の狭い形となりました。人間関係の豊かさ、1ターン者の多さが強みとして指摘され、色々な人々とのコミュニケーションの場を設けること、高齢者を宝として伝統文化等を継承する機会をつくることなど具体的な取り組みの提案が出されました。名物である山都そばの積極的な活用についてもアイデアが出されました。



山都地区 ワークショップの様子



浅見彰宏氏
(福島県有機農業ネットワーク都市との交流イベントにて)

福島県喜多方市山都地区
浅見 彰宏 (特活)福島県有機農業ネットワーク 理事・事務局長、
ひぐらし農園主宰

旧山都町は平成の大合併の際に喜多方市と合併した。その後、旧喜多方市が行政施策等の中心となる中で、山都地区は周辺化されていき、なんとかしなければと思っていた。地域の力診断ツールのワークショップを山都町で行った最大の効果は、自分たちの地域を考え直す良いきっかけになったということだった。

比較的地域のことをよく考えている人たちや団体の方々に集まってもらった。日頃、自分たちの仕事に関わることにについてはよく考えているが、地域の足元を見ることは少ない。リーダーの有無によって、地域間格差が出てきていると思うので、今まで何かやらなければと思っていた人々にとってもワークショップは良いきっかけになっただろう。終了後の懇親会の中でも、いろんなアイデアが出てきて活気づいた。診断ツールは今後改訂を重ねつつ、他の地域にもどんどん持ち込んで行く中で、新しいアイデアが出てくることを期待している。

日本中どの地域も縮小している。江戸時代から続く山腹水路からの農業用水により棚田を維持してきたが、農家の減少に伴い、水路を維持することが難しくなってきた。都市の人々に堰渡いのボランティアとして協力してもらうことで、水路の維持管理を行う取り組みを続けている。ボランティアの人にはお米やお酒も買い支えてもらっている。ボランティアの人数は毎年約50名、関係者はトータルで数百名にもなるが、年間に消費するお米や農産物の1割でもその方達に買ってもらえれば、大きな力になる。そのような経済的なつながりがこれからの課題と感じている。

最近、山都にも、若者の宿泊が増えてきた。彼らは将来に対する不安をものすごく感じている。そして、田舎に息づく生きる力に惹かれているように思われる。「会津留学」と銘打ち、生きる知恵や技術を学べる場を作っていきたいと考えている。空洞化した社会の中で人間性を取り戻すことができれば良いと思っている。(2016年3月4日「地域の力」フォーラムシンポジウム報告より)



会津留学
(写真:会津留学 Facebookより)



上堰米のお酒
(写真:本木・早稲谷環と里山を守る会 Facebookより)



第19回 山都寒晒しそばまつり 地元の方によるそば打ち

3.ワークショップに参加して

東和・山都でのワークショップに参加した皆さんからは、「参加して良かった」等概ね好い評価をいただきましたが、一方で「もっと時間があれば、地域の課題を出し切ってより具体的な取り組みにつなげられた」等、より良いワークショップ運営につなげるべきコメントもいただきました。以下では、参加者の皆さんから寄せられた診断ツールやワークショップ等に対するご意見や感想を紹介します。

■診断ツールについて

- ・ 地域の問題について、数値化することでより深刻に考えることができるので、ツールは参考になりました。ただ、主観が入るので日頃の感じ方(楽観的か悲観的か)によって数字は大きく変わってしまうかもしれません。(山都地区)
- ・ 診断ツールの設問は答えやすく、数字を見て気づきかけとなり良いと思います。年齢や性別で、どのような差が出るのかという点も気になるところです。(山都地区)
- ・ 普段考えていることを整理できたことが良かった。面白かった。/テーマを持って話し合いが出来ることは良い。(東和地区)

■ワークショップについて

- ・ あたりまえとして見過ごしている地域を見直す視点をワークショップはもたらしてくれました。(山都地区)
- ・ 課題に対する改善案が具体的に出てきたのでとても良かったと思います。これを機に新しい関わりが増えればと思います。(山都地区)
- ・ 外部の目が入ることの重要性を感じた。(東和地区)
- ・ ワークショップの場に来られない人をどのように巻き込んでいくのかを考える必要がある。(東和地区)
- ・ みんなで取り組む参画力の大切さを感じた。(東和地区)
- ・ 異なる地域同士でワークショップを行うのも意義があるのではないか。(東和地区)
- ・ 自分の集落でもワークショップをやってみたいと思った。/ 高齢者ワークショップはどうでしょう。(山都地区)

■地域について

- ・ 現在かろうじて保っている棚田の景観を今後どう維持していくのか、5年後を考えると不安/若い人にどうつなげていくか(東和地区)
- ・ 発信力は十分と思われるが、さらに努力する必要がある、インターネットを使った発信に期待している。(東和地区)
- ・ 山都の力を感じたワークショップでした。蕎麦の栽培面積が90ha以上で、100人以上の生産者が関わるすそ野の広さを感じました。しかも20軒以上も蕎麦屋さんがあり、4億円以上の経済効果は素晴らしいです。この強みを活かし、地域おこし協力隊等の新しい風を期待したいです。素晴らしい地域資源(山林、飯豊山、蕎麦等)をツールに落とし込んでいってほしいです。(山都地区)

■その他

- ・ 「地域の力」とは、今がんばっている人ががんばること!それがとりあえず一番大切。(東和地区)

4.主観的幸福度に関するアンケートから

「地域の力」診断ツールでは、地域を診断する6つの分野に加えて、地域の暮らしに対する主観的な満足度(幸福度)をうかがい、診断結果との関係性をみることで、「地域の力」を総合的に考えていきたいと思っています。アンケートでは、その地域に対する愛着や誇りについてうかがうとともに、これからも住み続けたいか、子どもにも住み続けてほしいかをお聞きし、最後に「あなたの考える幸せな地域とは」をお聞きしています。以下に、東和・山都で記述回答をいただいた、地域の中で愛着や誇りを感じる部分と幸せな地域像について紹介します。

■どんなところに愛着を感じていますか

- ・ 豊かな自然、伝統的な景観、山里の風景、子どものころからの記憶に残る風景、生まれたところ、自分の故郷、季節ごとの楽しみがあるところ
- ・ 人情の良さ、人とのつながりの深さ、仲間、地域コミュニティ、地域内交流、移住者を仲間として受け入れる心の広さ
- ・ 食の豊かさ、農林産物、山都蕎麦(地域おこし)

■どんなところに誇りをお持ちですか

- ・ 雄大な自然、伝統的景観、歴史のある山々、先祖伝来の土地や文化が脈々と守られているところ
- ・ 各方面で頑張っている人がいる、地域づくりを考えている人がいる、豊かな人材、住人が良い、活動の協力者が多い
- ・ 都市部の方々が、自然や棚田の景観、農産物などをほめてくれること、県内外から来てくれる人が多い
- ・ 独自の地域づくり、自給自足のできるどころ

■幸せな地域とは

- ・ みんなで互いに支えあう地域、弱者に対して配慮できる仕組みのある地域、一人ひとりが地域で暮らす価値を感じられる地域、一緒に夢を語れる地域、地域の活力となるような夢や希望を持った人々があふれる地域、自分も周りの人も生活の心配のない地域
- ・ 出きる限り地域内で自給自足できる環境の整った地域、お金に頼らない生活のできる地域、都会の金銭感覚に振り回されない地域
- ・ 自然と共生した暮らしが続けられる地域、本当の豊かさとは何かがわかる地域
- ・ 多様な職や暮らしが共生するモノカルチャーでない地域、世代間交流の図られている地域、大人の知恵や技を子ども達に伝える仕組みのある地域
- ・ 故郷



5. 今後に向けて～「地域の力」診断ツールを今後の取り組みにつなげるために～

「地域の力」診断ツールを活用したワークショップを行うことにより、以下のような気づきや効果が期待できると考えられます。これらのワークショップの成果を、ぜひ今後の地域づくりの取り組みにつなげていただければと思います。

① 「地域の力」診断ツールにより、地域の特徴を把握する

「地域の力」を構成する6つの分野から地域をチェックすることで、より包括的に地域の暮らしを眺めることができます。地域には様々な立場の人が住みそれぞれのニーズを持っていることや、普段はあたりまえなことが豊かな地域の宝であることに改めて気づくかもしれません。診断ツールを、より俯瞰した立場から地域の特徴をとらえ、現状を整理し認識するための「ものさし」として活用していただければと思っています。

② ワークショップにより、地域に対する現状認識を共有する

診断ツールへの各自の回答について議論する中で、地域について知らなかったり気づかなかったことを学んだり、認識の違いをすりあわせたりと、各自の地域に対する認識を共有することができます。その中からおのずと、地域の強みや弱み、地域の課題が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。地域づくりを担う地域の方々による話し合いの中から、地域の強みや課題が浮かび上がることが、その後の取り組みの主体的な関わりにもつながっていく大切なプロセスと考えます。

③ ワークショップにより、地域づくりのための協力関係を確認・強化する

ワークショップには、行政関係者、自治会、ボランティア団体、UIターン者、女性、若者等々、地域づくりに関わる様々な立場の方や、年齢、性別、職業などの多様な方に参加していただけるとよいでしょう。参加者間で地域の課題を共有する中で、地域への思いを伝えあい確認しあうことが、次の取り組みにつながっていくことと思います。今後の地域づくりの取り組みに対する組織的な支援体制の確立にも役立つものと考えられます。

④ 診断ツールワークショップを、一定期間経過した後にもう一度行い、「地域の力」の変化をチェックしその後の取り組みを検討する

「地域の力」は、もちろん、その地域の取り組みや、社会の変化に伴う様々な要因によって変化します。地域づくりの渦中にいると気づかない地域の変化があるかもしれません。取り組みのターゲットを超えた波及的な効果が表れている可能性もあります。一定期間経過した後にもう一度診断ツールによるワークショップを行うことにより、変化を可視化し、その後の取り組みへと活かしていただくこともできるのではないかと考えています。

<参考資料> 大江正章(2008)『地域の力ー食・農・まちづくり』岩波書店
大江正章(2015)『地域に希望ありーまち・人・仕事を創る』岩波書店
小田切徳美(2009)『農山村再生「限界集落」問題を越えて』岩波書店
公益財団法人東北活性化研究センター(2013)『幸福度の定量化に関する調査研究』報告書
幸せ経済社会研究所(2012)調査レポートNo.5 「自治体の幸福度や(真の)豊かさ等の指標化や政策目標への考慮状況に関する調査」報告
～幸せや真の豊かさは地方行政にどれだけ考慮されているか～
内閣府経済社会総合研究所幸福度研究ユニット(2012)幸福度に関するパネルディスカッション報告
農林水産省ホームページ 東海農政局 食と地域の「絆」づくり、
<http://www.maff.go.jp/tokai/noson/shinko/kizunadukuri/itoshiro.html>
DFID (1999) Sustainable Livelihoods Guidance Sheets, <http://www.enonline.net/dfidsustainableliving> (2015.7.18)

付 録

あなたの「地域」において、もっとも当てはまると思う選択肢を一つ選んでください。

1. 共生社会(地域の人々による参画と協力)

Q1 あなたが暮らす地域で積極的に活動している地域運営組織(自治会・NPOなど)はどれくらいありますか。

- 1.まったくない
- 2.1つある
- 3.2~3団体ある
- 4.それ以上ある

Q2 地域運営組織(自治会・NPOなど)に女性や若者が積極的に参加している。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q3 地域内で地域活動(ボランティア活動など)が盛んに行われている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q4 困った時に相談できる人がまわりにいる。または相談できる場所がある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q5 あなたが暮らす自治体では地域住民の要望を反映させる仕組みがある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q6 自治体の住民の要望を聞く仕組みでは、住民の多様性(女性、障害者、外国人等)への配慮がなされている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q7 地域づくりに関して住民が自治体に対して積極的な働きかけを行っている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q8 あなたが暮らす地域は治安の面で安全である。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q9 消防団の活動は活発である。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q10 都市(都市の場合は農山村)に居住する人との交流活動は盛んである。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q11 新たな移住者など地域外の人々を受け入れる仕組みや人が存在している。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q12 自治体あるいは地域の団体は外部に地域の取り組みを積極的に発信している。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

2. 経済・金融・産業（地域内経済循環）

Q13 あなたが暮らす地域で所得の格差はどのくらいありますか。

- 1. 大きい
- 2. 比較的大きい
- 3. 比較的小さい
- 4. 小さい

Q14 あなたはどんな金融機関を利用していますか。（地域金融機関の利用度合い）

- ① 大手都市銀行/ゆうちょ銀行/インターネットバンク
- ② 地域金融（地方銀行、農協、地域信用金庫等）

- 1. ①のみ利用
- 2. ①と②を併用しているが、主に①を利用
- 3. ①と②を併用しているが、主に②を利用
- 4. ②のみ利用

Q15 あなたが暮らす地域に雇用の機会は多い。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q16 地域で起業などの新たなビジネスチャレンジしやすい環境は整っている。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q17 地域内の商工業・サービス業などの後継者は決まっていることが多い。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q18 地域内の商店(全国チェーンではない商店)で買い物をすることが多い。

- 1.しない
- 2.ほとんどしない
- 3.時々利用する
- 4.いつも利用する

Q19 地域内で農業・商業・製造業の連携が盛んである。(地域の一次産品を地域で加工し販売しているか)

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q20 女性による経済活動が活発である。(地域の経済活動における女性の直接的な関わり)

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q21 住民が主導する地域独自の商品開発が盛んである。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q22 地域営農を守る制度・取り組みがある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q23 農林水産業の後継者はいる。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q24 あなたが暮らす自治体には、新たに農林水産業で働こうとする人たちを支援する独自の制度がある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q25 地域資源を生かした、外部の人を惹きつけるような地域独自の取り組みがある。

(グリーンツーリズム、マラソン大会など)

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

3.自然との共生(地域環境の保持・保全)

Q26 有機農業・環境保全農業(生態系に配慮した農業)は盛んである。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q27 家庭菜園・市民農園などに親しみ、食べ物を作る人々はどれくらいいますか。

- 1.まったくいない
- 2.少数いる
- 3.よくいる
- 4.大変多くの人が作っている

Q28 里山保全活動が盛んである。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q29 林業では間伐材の利用や広葉樹の植樹など持続性に配慮している。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q30 持続可能性に配慮した漁業が行われている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q31 地域の自然資源を生かしたエネルギー開発の取り組みが盛んである。(風力、太陽光、地熱エネルギーなど)

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 5.そう思う

Q32 景観を保存する取り組みをしている。(花の植栽や伝統的な建造物の維持など)

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q33 リサイクル・リユース活動が盛んである。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q34 土壌を豊かにする取り組みが活発である。(地域資源を利用した堆肥作りや化学肥料の削減など)

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q35 耕作放棄地を減らす活動が盛んである。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

4.暮らしと生活(すべての人々の豊かな暮らし)

Q36 高齢者が元気に働いたり活動したりする場所や仕組みが十分にある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q37 一人暮らしの高齢者を見守る人や仕組みがある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q38 日常的な病気や怪我に対応できる施設が十分にある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q39 地域内の平均寿命は全国平均と比べて高いか低いかな。

※地域として統計が出ている場合は、回答をお願いします。(男性80.50 女性86.83/2014)

- 1.平均よりも低い
- 2.平均と同じ
- 3.平均を上回っている

Q39 地域内で病気やけがなどの予防に関する活動や取り組みが盛んである。

※上Q39で統計が出ていない場合のみ回答よろしくお願いします。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q40 生涯学習など自発的に学ぶ機会、施設が十分にある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q41 あなたが暮らす市町村では小学校の統廃合が進んでいる。

- 1.そう思う
- 2.どちらかというと思う
- 3.どちらかというと思わない
- 4.そう思わない

Q42 地域で子どもを育てていくための環境は整っている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q43 障害者に暮らしやすい地域づくりが進められている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思わない

Q44 あなたのまわりに「ターナー者(地域出身ではない方)」はいますか。

- 1.いない
- 2.ほとんどいない
- 3.数人いる
- 4.多く存在する

Q45 地域づくりに関わっている外部人材(地域おこし協力隊、集落支援員など)はいますか。

- 1.いない
- 2.ほとんどいない
- 3.数人いる
- 4.多く存在する

Q46 行政の取り組み以外に、新規就農者などに対して農業等の専門的技術や農山村生活のアドバイスをを行う仕組みや指導をできる体制がある。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

5. 公共施設・設備(持続可能な暮らしの支え)

Q47 移動に際して、公共交通はとても整備されよく利用されている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q48 日常的な買い物や外出が困難な人をサポートする制度や助け合いが整っている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q49 自転車をどのくらい利用しますか。(都市向けの質問)

- 1.まったく利用しない
- 2.月に数回
- 3.週に数回
- 4.ほぼ毎日

Q50 住民が自発的活動を行う際に利用できる施設(公民館、コミュニティセンター等)が整っている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q51 図書館、公民館、児童館等の公共施設は活発に利用されている。

- 1.そう思わない
- 2.どちらかというと思わない
- 3.どちらかというと思う
- 4.そう思う

Q52 地域活動の中心となっている施設等がある。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q53 地域内でエネルギーの自給に関する取り組み、または議論が盛んにおこなわれている。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q54 水路やため池など農業用水確保のための維持整備を担う仕組みや組織が盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q55 地域住民による防災への取り組みが盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q56 空き家状況が把握されており、利活用を促進する取り組みが盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

6. 文化と伝統 (文化・伝統の保全と継承)

Q57 有形文化財(建物や施設)の保存活動が盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q58 無形文化財(民話の語り部や踊りなど)の継承活動が盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q59 地域の祭りや伝統行事は盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q60 住民が参加できるスポーツ・芸術の施設や組織、催し物などが盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q61 他の地域の人に参加し交流できるようなスポーツ・芸術・食等のイベントが盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q62 伝統的な食材や郷土料理等食文化の保存・継承活動が盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q63 暮らしに根付いた昔からの手仕事や知恵の保存・継承が盛んに行われている。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q64 世代間や異業種が交流しコミュニケーションをとる場がある。

- 1. 全くない
- 2. ほとんどない
- 3. たまにある
- 4. 頻繁にある

Q65 地域の自然や伝統的知識・技術等の地域資源を、地域内で普及・教育・共有するような取り組みが盛んである。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q66 地域外の人々に、地域の歴史・文化・伝統を伝える取り組みが盛んである(情報発信)。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

7. 主観的幸福度(生活の満足度と将来の希望)

Q67 現在の生活にどのくらい満足していますか。

- 1. 非常に不満
- 2. どちらかといえば不満
- 3. どちらかといえば満足
- 4. 非常に満足

Q68 地域に対して愛着を感じていますか。

- 1. 愛着を感じていない
- 2. 愛着を少しは感じている
- 3. 愛着を感じている
- 4. 愛着をととても感じている

Q68-2 Q68で愛着を感じているとお答えになった方にお聞きます。

どんなところに愛着を感じていますか。

Q69 あなたが暮らす地域を誇りに思いますか。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q69-2 Q69で誇りを持っているとお答えになった方にお聞きます。

どんなところに誇りを持っていますか。

Q70 現在の地域に住み続けたいですか。

- 1. そう思わない
- 2. どちらかというと思わない
- 3. どちらかというと思う
- 4. そう思う

Q71 子どもたちにもこの地域に住み続けてほしいですか。

- 1. そう思わない
- 2. あまりと思わない
- 3. 少し思う
- 4. そう思う

Q72 あなたの考える幸せな地域とはどのような地域ですか。具体的にお書きください。

■ グループ番号 _____ ■ 個人番号 _____

1. 共生社会	
指標番号	回答
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	
12	
合計	
平均	

2. 経済/金融/産業	
指標番号	回答
13	
14	
15	
16	
17	
18	
19	
20	
21	
22	
23	
24	
25	
合計	
平均	

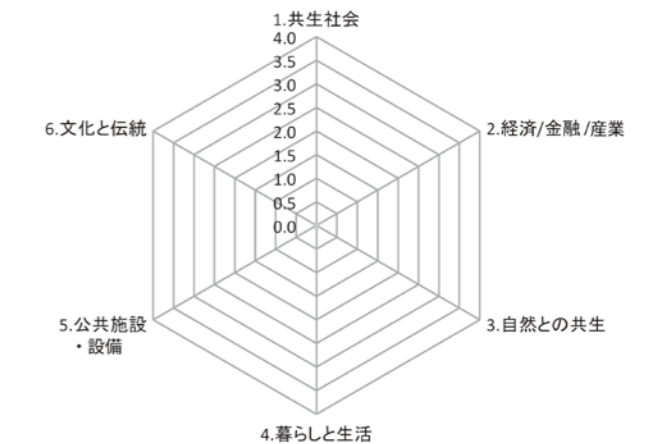
3. 自然との共生	
指標番号	回答
26	
27	
28	
29	
30	
31	
32	
33	
34	
35	
合計	
平均	

4. 暮らしと生活	
指標番号	回答
36	
37	
38	
39	
40	
41	
42	
43	
44	
45	
46	
合計	
平均	

5. 公共施設・設備	
指標番号	回答
47	
48	
49	
50	
51	
52	
53	
54	
55	
56	
合計	
平均	

6. 文化と伝統	
指標番号	回答
57	
58	
59	
60	
61	
62	
63	
64	
65	
66	
合計	
平均	

	回答
1. 共生社会	
2. 経済/金融/産業	
3. 自然との共生	
4. 暮らしと生活	
5. 公共施設・設備	
6. 文化と伝統	



ご協力ありがとうございました。

診断ツールの 7. 主観的幸福度 Q67~Q72 については、以下のようなアンケートにご記入いただき、回収の上、他の項目との関係を見ることも有意義です。

Q67 現在の生活にどのくらい満足していますか。

1.非常に不満 2.どちらかといえば不満 3.どちらかといえば満足 4.非常に満足

Q68 地域に対して愛着を感じていますか。

1.愛着を感じていない 2.愛着を少しは感じている 3.愛着を感じている 4.愛着をととても感じている

Q68-2 Q68で愛着を感じているとお答えになった方にお聞きます。どんなところに愛着を感じていますか。

Q69 あなたが暮らす地域を誇りに思いますか。

1.そう思わない 2.どちらかというと思わない 3.どちらかというと思う 4.そう思う

Q69-2 Q69で誇りを持っているとお答えになった方にお聞きます。どんなところに誇りをお持ちですか。

Q70 現在の地域に住み続けたいですか。

1.そう思わない 2.どちらかというと思わない 3.どちらかというと思う 4.そう思う

Q71 子どもたちにもこの地域に住み続けてほしいですか。

1.そう思わない 2.どちらかというと思わない 3.どちらかというと思う 4.そう思う

Q72 あなたの考える幸せな地域とはどのような地域ですか。具体的にお書きください。



一人ひとりの尊厳が保障される公正な社会の実現に向けて、持続可能な社会づくりの担い手を、セクターや国境を越えてつなぎ、人々の参加を促すことを目的に活動している。国内外のCSO(Civil Society Organization: 市民社会組織)とのネットワークや、多様なセクター間の連携を通して、調査・研究、情報発信、セミナー・イベント開催、提言活動等を行っている。活動テーマは、社会的責任(SR)・サステナビリティの推進(開発支援の新しい潮流調査を含む)、持続可能な開発目標(SDGs)情報発信、地域主体の持続可能な社会づくり等。

「地域主体の持続可能な社会づくり」事業の一環として、2013年度より、福島の有機農業生産者、ジャーナリスト、流通関係者、大学の研究者らとともに「地域の力フォーラム」を立ち上げ、地域資源を活用し内発的発展に取り組む農山村地域を訪れ、持続可能な第一次産業や農山村と都市との連携による地域づくりに関する調査を実施。この調査を踏まえ、持続可能な地域づくりのための「地域の力」診断ツールを作成した。今後は、診断ツールを活用したワークショップを重ねる中で、草の根からの持続可能な社会づくりを目指す。

「地域の力」診断ツール ワークブック

2016年 4月 1日 初版

編集:一般財団法人CSOネットワーク

(長谷川雅子、園城蒔子、高木晶弘、大沢望、芦馬貴文、横山晴香、黒田かをり)

発行: 一般財団法人CSOネットワーク

連絡先: 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 アバコビル5階

TEL: 03-3202-8188 FAX: 03-6233-9560 Email: office@csonj.org

URL: <http://www.csonj.org>

デザイン・印刷所: カワセ印刷株式会社

本書の一部または全部を許可なく複写・複製・転載することは著作権の侵害になります。

©一般財団法人CSOネットワーク



この冊子は平成26年度独立行政法人環境再生保全機構
地球環境基金の助成を受けて作成しました。

表紙写真:福島県二本松市東和地区、福島県喜多方市山都地区、福島県耶麻郡北塩原村五色沼